

子ども期の逆境体験に対する保護的体験についての研究の現状と展望

特任研究員 菅原 侑奈 修士課程1年 東 菜 摘 子
特任研究員 大賀 真伊 准教授 滝 沢 龍

はじめに

これまで、子ども期の逆境体験（Adverse childhood experiences; ACEs）（Felitti et al., 1998）が、成人期の心身の健康、発達、行動、リレーショナルヘルスに悪影響を及ぼしうることを示す研究が多くなされてきたが、近年、ACEsの悪影響を緩和する保護的体験に関する研究が次々に報告されてきた。本論考では、ACEsに対する保護的体験に関する研究の現状と展望について概観する。

まずは、ACEs研究について簡単に振り返る。ACEs研究は、ビンセント・フェリッティらにより始まった。1980年代、サンディエゴのカイザーパーマネンテ（保険会社）の予防医学分野の研究者で、肥満治療の専門家として働いていたフェリッティは、肥満治療プログラムへの参加者たちを診ていてあることに気が付いた（Felitti, 2002）。減量に成功していたのにも関わらず、プログラムが完了する前に辞めてしまい、その後リバウンドしてしまう参加者たちがいたのだ。フェリッティは、このような約300人の参加者たちにインタビューを行った。その結果、これらのほぼ全員に、子ども時代のトラウマがあることを明らかにした。その後、ロバート・アンダとともに、米国疾病管理予防センター（CDC）との共同研究を進めた（Felitti et al., 1998）。そしてACEs（小児期逆境体験）スコアが作成され、ACEsが、心身の健康や発達、行動、リレーショナルヘルスに影響を与えることが分かった。

ACEsの質問は現在10項目で、既出版物から引用すると、次のようになる（Kain, 2018, 花丘・浅井, 2019）。「あなたが18歳の誕生日を迎える前に、(a)一緒に住んでいる親や大人が、あなたをののしったり、侮辱したり、こきおろして恥をかかせたりすることがしばしば、あるいは非常に頻回にありましたか？あるいは、体を傷つけられるという恐れを感じたことはありますか？(b)一緒

に住んでいる家の親や大人が、あなたを押ししたりつかんだり、強く殴って、あざがでたり、肉体を傷つけるようなことがしばしばあるいは非常に頻回にありましたか？(c)大人、あるいはあなたより5才以上年上の人が、あなたに性的なタッチをしたり、あなたに彼らの体を性的にタッチさせたりしたことがありましたか？あるいは、あなたに対して実際にオーラル、肛門、性器によるセックスをしようとしたり、実際に行ったことがありますか？(d)あなたは、家族のだれもあなたを愛してくれない、あるいは、あなたのことを大切にできると考えてくれないと感じたことが、しばしば、あるいは非常に頻回にありましたか？あなたの家族は、お互いを大切にしたり、親密になったり、助け合ったりしていませんでしたか？(e)食べるものが十分でないとか、汚れた服を着ていたとか、誰も守ってくれないと感じることがしばしばあるいは頻回にありましたか？あなたの親が、酒に酔っていたり薬物で酩酊していたりして、あなたが病気で医師の診察を受ける必要があっても、病院に連れて行ってくれないことがありましたか？(f)実の両親が離婚したりあなたを捨てたり、その他の理由で、あなたと離れ離れになったことはありましたか？(g)あなたの母親か、義母が押されたり、つかまれたり、叩かれたり、ものを投げつけられたりしていたことがしばしばあるいは非常に頻回にありましたか？あるいは、繰り返し数分間にわたって殴られたり、銃やナイフで脅されていたことがありますか？(h)問題がある態度でアルコールを飲む人、あるいは、アルコール依存症の人と一緒に生活をしていましたか？(i)うつ病や精神障害、自殺、自殺企図のあった人と一緒に生活していましたか？(j)家族が刑務所に入れられたことはありますか？」。この10項目の尺度を用いたACEs研究はその後、世界中の研究者に広がっていった。

また、現在ICD-11の改訂が目前に迫っている。この改定では、複雑性PTSDの項目が追加される予定であ

る。今後臨床において、複雑性PTSDを考える機会も増えていくであろう。ACEsと複雑性PTSDは関連があるため、保護的体験の概念について知っておくことは重要である。

保護的体験について述べる前に、子どもの「レジリエンス」という概念を考えるにあたって、注意しておくべき観点をふたつみしておく必要がある。

まず、ルーサー (Luthar, 2000) は、科学者は「回復力のある若者」や「子どもたちの回復力の育成」など、子ども自身に焦点を当てたフレーズから離れ、代わりに、「回復力のある適応、プロファイル、環境」を参照することが賢明であると示唆した。特定の個人属性（楽観的な感覚や内部統制など）が保護機能に役立つという発見を議論する際に、研究者が適切に「これらの属性が子どもに消えないように埋め込まれているわけではない」という予防的声明を含めることが重要だと述べた。それらは、個人特性というよりも、実質は生活環境によって形作られていると考えられるからである。科学者が責任を持ってレジリエンスに関する知識の範囲を伝え、「レジリエンスは無敵を意味する」や「子どもたちだけが十分に努力すれば、レジリエンスを獲得できる」などの誤った見解を回避することが重要であるとも述べている。とすると、子どもは日々成長し続け変化する過程を生きているため、固定した個人特性を持っているかのようにとらえるわけにはいなくなる。また、子どものおかれた状況や環境は、子どもの責任に帰依するわけではなく、ACEsがあることもないことも、保護的体験があることもないことも、子どもに責任を負わせるべきではないことになるのだろう。

次に、ジマーマンのレジリエンスモデル (Zimmerman, 2013) では、その構造を大きく3つに分けて説明している。代償モデル (Compensatory model)、保護因子モデル (Protective factor model)、チャレンジモデル (Challenge model) である。まず、一番目の代償モデルでは、代償的要因が、リスクとは逆の効果を結果に及ぼす。それは直接的で、リスクから独立した影響と想定されている。例えば、ACEsが後の心身の健康に悪影響を与えるが、代償的要因はリスクから独立して好ましい影響を与えるので、ACEsと代償的要因が共起した場合に悪影響が中和され、結果的に結果が好転するということになる。二番目の保護因子モデルでは、保護因子はリスクとその結果の間の相関関係に変化を与える。補足すると、Zimmermanによる保護因子モデルにはリスク-保護因子と保護-保護因子があるが、ここではリスク-保護因子について述べることにする。例えば、ACEsと

心身の健康との関係自体を、保護的因子が緩和するという理論だ。第三に、チャレンジモデルは、適度なリスクへの暴露が、人生の後のさらに重大な暴露を克服するのに役立ち、否定的な結果を防ぐというものだ。ただし、この初期のリスクへの暴露は、負担がかかりすぎるものではないという前提である。子ども期の逆境的体験 (Adverse Child Experiences) について論じる本文では、主に代償モデルと保護因子モデルの二つのレジリエンスモデルをまとめて「保護的」と述べていくが、今後の研究においては、これらのメカニズムの差異を念頭におきながら進めていくことが望まれる。

目的

ACEsに対する保護的体験のスケールは複数開発されており、重複部分も多く概念整理が必要である。本研究では、現状の保護的体験スケールに関する先行論文を整理し、今後の研究の方向や臨床応用についての展望を考察する。

方法

論文検索は、PubMed/MEDLINE/PsychoINFO/Web of Scienceを用い「Adverse Child Experiences and Positive/Protective」等で行い、保護的体験の尺度や保護的因子に関する先行研究を調査した。

どのようなスケールおよび保護因子が報告されているのかを述べたのち、スケールの項目や個々の保護因子を大まかな分類に整理してまとめていく。

結果

保護的体験として提案されている主なスケールには、PACEs (Protective and Compensatory Experiences) (Hays-Grudo & Morris, 2020)、PCEs (Positive Child Experiences) (Bethell et al., 2019)、BCE (Benevolent Childhood Experiences) (Narayan et al., 2017)、CYRM-28 (Child and Youth Resilience Measure) (Ungar & Liebenberg, 2011)、RPF (Resilience Protective Factors Checklist) (Powell et al., 2021)、などがあった。又、スケールではないが、アメリカ疾病予防センター (CDC) が推奨するSSNRs (Safe, Stable and Nurturing Relationships) (CDC, 2014) という概念もあった。

PACEs

10項目からなるスケールであり、「体験」と「関係」に重きをおいており、直接的に個人特性には言及しない。10項目をそれぞれ簡単に要約すると(a)養育者からの無条件の愛(Unconditional Love)(b)少なくとも一人の親友(c)コミュニティでのボランティア(d)グループ活動の一員である(e)メンターをもつ(f)清潔で安全で十分な食べ物のある家(g)学校で教育を受けている(h)芸術的・知的な趣味(i)身体活動(j)家庭に明確で公平なルールやルーチンがある、である。研究などを想定したスケール以外に、PACEs Planとして、5才以下、6才以上18歳以下、18歳以上(大人)と、年齢に応じて応用した当事者記入用の規格が用意されており、臨床応用に適している。ひとつひとつの項目の現状と、アクションと、ゴールを記入する欄がある。ここに、PACEs Planの具体例として、「無条件の愛」の項目が、年齢によってどのように変化しているか提示する。5歳以下では、「養育(Nurturing care)。養育者は、(子どもがストレスを感じているときは特に) 敏感な方法で子どものニーズをサポートし、なだめる」となっており、6歳~18歳では、「無条件の愛。彼らが無条件に愛している養育者。何があっても大事にされるであろうと疑わない」となっており、大人では、「愛。私は無条件に誰かに愛され、無条件に誰かを愛している。私は大事にされていることを疑わない」となっている。このように、どの年齢層でも使用でき、かつ、その年齢による適切な表現に変わっている。

PCEs

7項目からなるスケールであり、こちらも「体験」と「関係」に重きが置かれ、直接的な個人特性への言及はない。7項目をそれぞれ要約すると、(a)家族に気持ちを話せる(b)辛いときに家族が助けてくれる(c)コミュニティの伝統を楽しめる(d)学校に居場所がある(e)友達に支えられている(f)親以外に少なくとも二人支えてくれる大人がいる(g)大人に守られ安心を感じる家、である。これらの項目は、後述するCYRM-28の項目から選択されており、約6000人の参加する大規模研究で、ACEs暴露後のPACEsの保護的効果を検証している。

BCEs

10項目からなるスケールである。項目をそれぞれ要約すると、(a)安全を感じる養育者が少なくとも一人いる(b)少なくとも一人の親友(c)心地よさを与える信念がある(d)学校が好き(e)気にかけてくれる先生が少なくと

も一人いる(f)よい隣人がいる(g)サポートや助言をくれる養育者以外の大人がいる(h)いい時間を過ごす機会がある(i)自分が好きもしくは自分自身であることは心地よい(j)食事や就寝時間のような予測可能な家族のルーチンがある、である。上述の二つのスケールと似通っているが、二点の個人特性が入っている点が異なっている。このスケールは英語版とスペイン語版が用意されており、言語多様性に配慮した作りとなっている。

CYRM-28

28項目からなるスケールである。このスケールはすでに2011年に発表されており、ACEsの悪影響に対する保護的要因という枠組みではない。子どものレジリエンスに関するスケールであるが、前述のZimmermanによる代償モデルに該当するものとして紹介する。多文化に配慮するために、11か国もの研究者がスケールの作成に携わり、また多言語に訳されている。28項目をそれぞれ要約すると、(a)尊敬する人がいる(b)周囲の人と協力している(c)教育を受けることは大切だと感じている(d)様々な状況においてどのように行動すべきかを知っている(e)養育者は親密に自分をみてる(f)養育者は自分についてよく知っている(g)空腹時に食べ物がある(h)始めたことをやり遂げようとする(i)スピリチュアルな信念(j)民族的なバックグラウンドに誇りを持っている(k)自分と一緒にいると楽しいと人は思う(l)自分の感じていることを養育者に話す(m)自分や他人を傷つけず(ドラッグや暴力)に問題を解決できる(n)友達に助けられている(o)助けが必要な時に、自分のコミュニティでどこに行けばいいかわかる(p)学校に居場所がある(q)養育者はつらいときに、味方になってくれる(r)友人がつらいときに、味方になってくれる(s)自分はコミュニティで公平に扱われている(t)自分は責任を持って行動できることを他の人に示す機会が与えられている(u)自分の強みを知っている(v)宗教活動に参加(w)コミュニティに奉仕(x)養育者と一緒にいると安心する(y)将来役に立つスキル(仕事やケア)を身に付ける機会がある(z)養育者の文化や家族の伝統を楽しめる(α)コミュニティの伝統を楽しめる(β)自分の国の国民であることを誇る、である。

RPFC

25項目からなるチェックリストであり「関係」「体験」「個人特性」を総合的に網羅している。25項目をそれぞれ要約すると、(a)自分の問題について考え解決策を見つけられる(b)行動する前に考え、落ち着いて行動でき

る(c)自分のいいところに満足している(d)自分には能力があり、自分も社会も認めている(e)自分の決断と行動で自分の人生に影響を与えることができる(f)宗教的信念やスピリチュアリティ(g)逆境においてもポジティブな態度(h)自分は好ましい人柄だと思う(i)辛いときも自分を強いと思う(j)人生を良く変えたいと思う(k)スポーツや趣味や仕事などポジティブな活動(l)良いときも悪いときもサポートしてくれる家族(m)安全で仲の良い家庭(n)宿題や活動を支えてくれる養育者(o)教育は重要だと考える養育者(p)枠組みやルールを与え子どもを見守る養育者(q)いつも語りかけてくれ、ルールを守るための理由を説明する養育者(r)自分を信じてくれる養育者(s)家族以外にサポートしてくれる大人がいる(t)ポジティブな(関係の)友達がいるサポートしてくれる(u)学校で安全を感じ先生が気にかけてくれた(v)隣人が気にかけてくれた(w)近隣は安全だった(x)ポジティブな(関係の)ボーイフレンドやガールフレンドがいるサポートしてくれる(y)ストレスコーピングの方法として運動をしている、である。

SSNRs

CDCは、子どもと大人の間で安全で安定した育成関係は、長期的な健康を損なう、子どもの虐待やその他の有害な曝露に対する予防として重要であり、健康な人間関係はすべての基礎となると述べており、その健康な関係として、「安全(Safe)、安定(Stable)、養育(Nurture)」を挙げている。安全とは、子どもが心身の危険から守られている程度を指す。安定とは、子どもの環境における予測可能性や一貫性の程度である。例えば、安定していてルーチンを持つ家庭などである。養育とは、親・養育者がいて、子どものニーズに対応できる程度を指す。養育的關係を育むことにより、子どもは自信をもって環境を探索することができるようになる。滝沢らの研究(Jaffee, 滝沢, Arseneault, 2017)では、マルトリートメントを経験した女性が、パートナー関係において、安全でサポートティブで養育的な関係を体験することによって、心身の健康の改善につながることを示された。ある種の保護的体験が、子ども時代のみならず大人になってからも効果的であることは、希望的な視座を与えてくれる。また、クローチらの研究(Crouch et al., 2019)では、ACEに対するSSNRsの保護的な役割を報告した。

その他の保護的体験

スケールとしてまとまっているもの以外で、ACEsの

悪影響を緩和するものを報告する研究が報告されている。その中で、上記のスケールの項目として上がってなかったものをふたつ挙げる。母親とパートナーとの関係と、自然体験である。ワルシュらの研究(Walsh et al., 2019)によると、ニュージーランドのコホート研究のデータを用いて、予測リスクモデルによってACEsリスクが高いと割り出された出生児のうち、生後54か月までに実際にはACEsを経験しなかった子どもの家族の保護因子を探索したところ、最も大きな保護因子が、母親とパートナーとの良好な関係であったのだという。また、大規模な研究報告はないものの、公園に行く、動物と触れ合う、治療的キャンプ、アドベンチャーエデュケーションなど、逆境体験をもつ子どもたちに対する支援として、自然体験の意義についての論考も報告されている(Touloumakos & Barrable, 2020)。日本の文化的背景を考えると、森や自然は、森林浴でも証明されているような科学的な効果だけではなく、アニミズム的な観点から、前述のスケールの「スピリチュアリティ」に近似する役割も部分的に持っている可能性がある。

考察

ここまで、保護的体験スケールを概観した。それぞれ多くの重複項目を含んでいるため、概念整理が必要だと考えられた。考察においては、各スケール内の各項目を内容ごとに整理し、今後の展望を考察していく。

1. 安全・安心・食料

「大人に守られ、安心を感じる家(PCEs)」、「少なくとも一人の安心する養育者(BCEs)」、「養育者と一緒にいると安心する(CYRM-28)」、「安全で仲の良い家族(PRFC)」、「安全(SSNRF)」、「清潔で安全で十分な食べ物のある家に住んでいる(PACEs)」、「空腹時に食べ物がある(CYRM-28)」

2. 信頼・愛・親密さ・養育的態度

「養育者は、辛いときに味方になってくれる(PCEs, CYRM-28)」、「良いときも悪いときもサポートしてくれる家族(PRFC)」、「養育者からの無条件の愛(PACEs)」、「養育者は親密に自分を見てくれる(CYRM-28)」、「養育的態度(SSNRF)」、「自分を信じてくれる養育者(PRFC)」、「母親とパートナーの良好な関係(Walshらの研究)」

3. ルール・ルーチン・安定

「家族に、明確で公平なルールやルーチンがある (PACes)」, 「食事時間や就寝時間などの家庭での決まりがある (BCEs)」, 「枠組みやルールを与え、子どもを見守る養育者 (PRFC)」, 「安定 (SSNRF)」

4. 対話・言語コミュニケーション

「自分の感じていることを養育者に話せる (PCEs, CYRM-28)」, 「養育者は自分についてよく知っている (CYRM-28)」, 「いつも語りかけてくれ、ルールを守るための理由を説明する養育者 (PRFC)」

5. 自己肯定感, 自己効力感, ポジティブシンキング

「自分自身が好き、自分であることを心地よく思う (BCEs)」, 「自分は好ましい人柄だと思う (PRFC)」, 「自分と一緒にいると楽しいと思う (CYRM-28)」, 「自分の強みを知っている (CYRM-28)」, 「自分のいいところに満足している (PRFC)」, 「自分には能力があり、自分も社会も認めている (PRFC)」, 「自分の決断と行動で自分の人生影響を与えることができる (PRFC)」, 「人生を良く変えたいと思う (PRFC)」, 「逆境においてもポジティブな態度 (PRFC)」, 「辛いときも自分を強と思う (PRFC)」

6. 問題解決思考, 自己コントロール

「自分や他人を傷つけず (ドラッグや暴力), 問題を解決できる (CYRM-28)」, 「様々な状況において, どのように行動すべきか知っている (CYRM-28)」, 「始めたことをやり遂げようとする (CYRM-28)」, 「自分の問題について考え, 解決策を見つけられる (PRFC)」, 「行動する前に考え, 落ち着いて行動できる (PRFC)」

7. 信念・宗教・スピリチュアリティ

「自分をなぐさめる信念を持つ (BCEs)」, 「宗教活動に参加 (CYRM-28)」, 「スピリチュアルな信念 (CYRM-28)」, 「宗教的信念やスピリチュアリティ (RPFC)」

8. 友人

「少なくとも一人親友を持つ (PACes)」, 「友人に支えられている (PCEs, CYRM-28)」, 「少なくとも一人のよき友人 (BCEs)」, 「友人が, 辛いときに味方になってくれる (CYRM-28)」, 「ポジティブな関係の友人がいてサポートしてくれる (PRFC)」

9. 学校での居場所, 学校の先生との関係

「学校に居場所がある (PCEs, CYRM-28)」, 「学校が好きだ (BCEs)」, 「少なくとも一人の気にかけてくれる先生 (BCEs)」, 「学校で安全を感じ, 先生が気にかけてくれた (RPFC)」

10. 教育

「教育を受けることは大切だと感じている (CYRM-28)」, 「将来役に立つスキルを身に付ける機会がある (CYRM-28)」, 「学校で教育を受けている (PACes)」, 「教育は重要だと考える養育者 (PRFC)」, 「宿題や活動を支えてくれる養育者 (PRFC)」

11. メンター・養育者以外の頼れる大人

「メンターを持つ (PACes)」, 「親以外に少なくとも二人気にかけてくれる大人がいる (PCEs)」, 「サポートや助言をくれる養育者以外の大人がいる (BCEs)」, 「尊敬する人がいる (CYRM-28)」, 「家族以外にサポートしてくれる大人がいる (PRFC)」, 「隣人が気にかけてくれた (PRFC)」, 「よい隣人がいる (CYRM-28)」, 「助けが必要な時に, 自分のコミュニティでどこに行けば良いかがわかる (CYRM-28)」

12. コミュニティでのボランティア, 集団活動, 役割を持つ

「コミュニティでのボランティアをする (PACes)」, 「コミュニティに奉仕 (CYRM-28)」, 「少なくともひとつのグループ活動の一員になる (PACes)」, 「周囲の人と協力している (CYRM-28)」, 「自分は責任をもって行動できることを他人に示す機会がある (CYRM-28)」, 「自分はコミュニティで公平に扱われている (CYRM-28)」

13. 趣味やスポーツ, ポジティブな活動

「芸術的・知的な趣味を持つ (PACes)」, 「身体活動をしている (PACes)」, 「よい時間を過ごす機会 (BCEs)」, 「スポーツや趣味や仕事などポジティブな活動 (PRFC)」, 「(ストレスコーピングの方法として) 運動をしている (PRFC)」

14. コミュニティや家族の伝統, 民族アイデンティティ, 愛国心

「コミュニティの伝統を楽しめる (PCEs, CYRM-28)」, 「民族的なバックグラウンドに誇りを持っている (CYRM-28)」, 「自分の国の国民であることを誇る (CYRM-28)」, 「養育者の文化や家族の伝統を楽しめる

(PRFC)」

15. 環境 (治安, 自然体験)

「近隣は安全だった (PRFC)」, 「自然体験」

16. ガールフレンド・ボーイフレンド

「ポジティブな (関係の) ボーイフレンド, ガールフレンドがいる (PRFC)」

以上, 各スケールの各項目を内容ごとに整理した。重複部分が可視化され, だいたいどのような項目が重要なかが整理されたため, 今後の研究や臨床応用に役立てたい。

結論

子ども期の逆境的体験が, のちの心身の健康やリレーションナルヘルスに悪影響を与えることが広く知られている中で, ポジティブで保護的な体験が, それらを改善させるという研究が, 2020年前後に次々と発表されるようになってきた。本論考では, それらの研究を概観し, 重複項目をまとめた。(a)家庭での安全・安心・食料(b)家庭での信頼・愛・親密さ・養育的態度(c)家庭でのルール・ルーチン・安定(d)家庭での対話・コミュニケーション(e)自己肯定感・自己効力感・ポジティブシンキング(f)問題解決思考・自己コントロール(g)信念・宗教・スピリチュアリティ(h)友人(i)学校での居場所・先生との関係(j)教育(k)メンター(l)ボランティア・役割(m)趣味・スポーツ(n)伝統や民族アイデンティティの項目に重複が見られ, 重要な体験であると考えられた。

保護的体験のメカニズムが, レジリエンスモデルにおける代償モデルなのか, 保護因子モデルなのか, その両方であるのか, というのは研究途上であるものの, 保護的体験が心身の健康やリレーションナルヘルスを促進することは明らかになっている。逆境下におかれている子どもたちに対して, 逆境の数を減らす方向の介入とともに, 保護的体験を増やす介入も重要であると考えられる。

また, ポジティブな体験は子ども時代に限らず, 大人になってからでも効果がある可能性が示唆されている(Jaffee, 滝沢, Arseneault, 2017)。逆境下にあると判断されている子どもたちや, 逆境体験をした大人に限らず, 保護的体験の概念は, 子ども本人, 親, 学校, コミュニティ, 社会が, 子どもにとってどのような体験が重要であるのかに目をむける機会を与える。

ここで, 保護的体験概念を生活や臨床で扱う際に, ひ

とつ留意しておきたいことがある。先述したルーサー(2000)は, レジリエンス概念を「回復力のある適応, プロファイル, 環境を参照することが賢明である」と言及して, 子ども自身に埋め込まれた属性ではないことに注意を促している。こうした議論と並行して, 「保護的体験がない(なかった)/少ししかない(なかった)」と, 現状や過去の不足に帰属して目を向けるために使用するよりも, 今, 目の前にあるリソースの芽に目を向け, その芽を育てていくという方向性(Kain, 2018, 花丘, 2019)や, 過去の保護的体験を掘り起こし, そこから得た強みに目をむけるという方向性(Karatzias et al., 2020)(Narayan et al., 2019)や, 未来にむかって創造していく体験の情報を得るという方向性(Powell et al., 2021)で使用することも大切になるであろう。また, 保護的体験の概念が窮屈さを生んだり, 教条的になったりほしくないように注意を払っていく必要もあると考え

文献

- Bethell, C., Jones, J., Gombojav, N., Linkenbach, J., Sege, R. (2019). Positive Childhood Experiences and Adult Mental and Relational Health in a Statewide Sample: Associations Across Adverse Childhood Experiences Levels. *JAMA Pediatrics*, 173(11), e193007. <https://doi.org/10.1001/jamapediatrics.2019.3007>
- Centers for Disease Control and Prevention (2014). Essentials for Childhood: Steps to create safe, stable, nurturing relationships and environments. Retrieved from: http://www.cdc.gov/violenceprevention/pdf/essentials_for_childhood_framework.pdf
- Crouch, E., Radcliff, E., Strompolis, M., Srivastav, A. (2019). Safe, Stable, and Nurtured: Protective Factors against Poor Physical and Mental Health Outcomes Following Exposure to Adverse Childhood Experiences (ACEs). *Journal of Child & Adolescent Trauma*, 12, 165-173.
- Felitti, V. J. (2002) The Relation Between Adverse Childhood Experiences and Adult Health: Turning Gold into Lead. *The Permanente Journal Winter 2002*, 6(1), 44-47.
- Felitti, V. J., Anda, R. F., Nordenberg, D.,

- Williamson, D. F., Spits, A. M., Edwards, V., Koss, M. P., & Marks, J. S. (1998). Relationship of Childhood Abuse and Household Disfunction to many of the Leading Causes of Death in Adults. *American Journal of Preventive Medicine*, 14(4) (May),245-258.
- Hays-Grudo, J., & Morris, A. S. (2020). *Adverse and Protective Childhood Experiences: A Developmental Perspective*. Washington DC: APA Press.
- Jaffee, S. R., Takizawa, R. and Arseneault, L. (2017). Buffering effect of safe, supportive, and nurturing relationships among women with childhood histories of maltreatment. *Psychological Medicine*, 47(15), 26628-2639.
- Kain K. L., and Terrell. S. J. (2019). レジリエンスを育む (花丘ちぐさ・浅井咲子訳), 東京:岩崎学術出版社, (Original work published 2018)
- Karatzias, T., Shelvin, M., Fyvie, C., Grandizon, G., Garozi, M., Latham, E., Sinclair, M., Ho, G., McAnee, G., Ford, J. D. & Hyland, P. (2020). Adverce and benevolent childhood experiences in Posttraumatic Stress Disorder(PTSD) and Complex PTSD(CPTSD): implications for trauma-focused therapies. *European Journal of Psychotraumatology*, 11(1), 1793599.
- Luther, S. S., & Chiccetti, D. (2000). The Construct of resilience: Implications for interventions and social policies. *Developmental and Psychopathology*, 12, 857-885.
- Narayan, A. J., Ippen, C. G., William, W., Lieberman, A. F. (2019). *Development and Psychopathology*; Cambridge, 31(1), 173-187.
- Narayan, A.J., Rivera, L. M., Bernstein, R. E., Harris,W. W., & Lieberman, A. F. (2018). Positive childhood experiences predict less psychopathology and stress in pregnant women with childhood adversity: A pilot study of the benevolent childhood experiences (BCEs) scale. *Child Abuse & Neglect*, 78, 19-30.
- Powell, K. M., Rahm-Knigge, R.L.& Conner, B.T. (2020). Resilience Protective Factors Checklist (PRFC): Buffering Childhood Advercity and Promoting Positive Outcomes. *Psychological Reports*, 124(4), 1437-1461.
- Touloumakos, A. K. and Barrable, A. (2020). Protective and Therapeutic Potential of Nature. *Frontiers in Psychology*, 11, 597935.
- Ungar, M., & Liebenberg, L. (2011). Assessing resilience across cultures using mixed methods: Construction of the child and youth resilience measure. *Journal of Mixed Methods Research*, 5(2), 126-149.
- Walsh, M. C., Joyce, S., Maloney, T., Vaithaianathan, R. (2019). Exploring the protective factors of Children and families identified at highest risk of adverse childhood experiences by a predictive risk model: An analysis of the growing up in New Zealand cohort. *Children and Youth Service Review*, 108, 104556. <https://doi.org/10.1016/j.childyouth.2019.104556>
- Zimmerman, M. A. (2013). Resiliency Theory: A Strengths-Based Approach to Research and Practice for Adolescent Health. *Health Education & Behavior*, 40(4), 381-383.

(指導教員 滝沢龍准教授)